

連絡役を受け持つわけです。

最も都合のよい場所をあらかじめ決めておき、石炭山の間をぬって活動開始となる。三十分くらいかけて焼き上げたピートは、焼き芋と同じような味で、餓鬼道抜けやらぬ私たちにとって、これほどありがたいものはありません。

かくしてこの大根焼きはひそかに続けられたのです。ところが、こうした甘い生活も長くは続きません。私たちが楽しみに焼いているピートを、焼き上がる寸前に泥棒する者が現れたのです。ほかでもない、あの警備監視役のマンドリンを持ったソ連兵だったのです。盗みかくれて大根を埋めるところを知らぬ振りで見過ごし、時間を見計らって一瞬早く持ち去るのです。

「や、またやられたヨ」私たちにしてみれば大損害でしたが、もちろん抗議は筋違い。彼らはむしろ好意的で、寛大にこれをとがめようとしませんでした。敵ではなく、戦勝者、戦敗者でもなく、人間と人間の関係に戻りつつあったのでしょう。

こうした抑留者としての生活をしながら、二回目の冬を越し、どうやらここまで命は延びられたのでした。長い間苦しんだ疫病の診断結果で、祖国に帰還できることとなり、昭和二十二年夏、ナホトカから東舞鶴港に上陸、復員することができました。

抑留生活を振り返って

静岡県 熊谷 精一

私は、昭和十七年十二月一日に臨時召集により第六航空教育隊（八戸市）に入隊し、一期検閲後十八年三月末日樺太大谷の第四十九飛行場大隊に転属。驚いたのは営内は雪の下、営兵は顔だけで防寒服で身を固め、大変な場所に転属してきたと思った。その後間宮海峡を北上して北緯五十度線近くの塔路町にある前進飛行場に分遣隊員として勤務。その間に本隊は北千島占守島の飛行場に転進、私たちも呼び出しを受け十九年六月末、小樽港を出港し、オホーツク海を航空機、駆逐

艦等の護衛を受けつつ四日間航海の末、無事占守島長崎港に上陸。小樽港出港時には夏の気候、四日後には真冬の占守島中央部にある三好の飛行場に到着、兵舎は三角兵舎、滑走路は角材を並べた飛行場で驚くばかり、大谷の飛行場とは比較にならない。

私は本隊を離れ長崎港に分遣。耐寒天幕を張り七人ほどにて食糧、弾薬、衣服等の受領、少人数のために吹雪の中の作業は大変苦勞をした。相手の顔を見れば眉毛に三角に氷がついており、寒さが身にしみる思いがした。

その後、海軍の片岡の飛行場に分遣になり、陸軍の飛行機が濃霧のために片岡の飛行場を使用する場合の作業であった。

占守島の夏は、霧の発生が多く海峡から煙のごとくわき出てくる。

夏とはいえ霧ばかりで、太陽の光を見ることは稀であり、年間のうち十か月は雪の中で生活し、兵舎は三角兵舎でランプ生活、入浴もできず、洗濯も十分でなく、夜はシラミつぶしのため落ち着いて寝られない日

々でした。

二十年八月十五日の放送は、通信隊の受信機にて終戦を知りました。

十八日ソ連軍夜陰に乘じ国端崎に上陸。両軍戦闘開始し、両軍の話し合いの上二十三日停戦、武装解除、ソ連の命令により片岡の海軍の建物に移動して、帰国の日を待つ。

二十年十一月下旬に出港するまで、ヤンボンスキードモイの言葉につられ二回ほど長崎港に乗船のために行くが船は到着せず、兵舎に帰ると中には何にもなくソ連兵がすべてを持ち去っていた。

三回目にしてやっと約五千トン級の貨物船に乗船することができた。食事は十分でなく船倉より米を集めて炊く。飯盒一杯で二日間に食事するようにする。出港後オホーツク海にて大時化に遭う。貨物船は木の葉のごとく揺れる、ローリングしたときは地震がきたように船が揺れる音がする。

食欲はなく体を横にしているだけ、船は宗谷海峡を西に向かって航海しているのがわかる。朝、甲板へ出

て見たら右側の海岸に白い家が見えてきた。これは沿海州を南下していることがわかった。我々は抑留されるのだという感じがひしひしと身に迫る。到着した港は、ナホトカ港であった。

ソ連の寒さが身にしみる生活が始まるのだと実感が出てきた。上陸後、半日ほど山の中に連れて行かれ平坦な地に着いたところで野宿することになり、周囲は山ばかりで何もない。いずれにしても小屋くらいつくらなくてはならない。一班二十人お互いに手分けしてかやを手で一本一本取る人、乾燥草が近くに積んであるので巻脚絆で束ねて帰る人、立ち木を切り取り持ち帰る人、お互いに協力し合って、炭焼き小屋のような小屋をつくる。骨組だけは三角小屋で三坪くらい、屋根にはかやを三十センチくらい厚くし、ひもなどないので、毛布を裂いてひもにして使用し、内側に毛布を張り下には乾燥草を三十センチくらい敷き、中で火を燃やしても寒さのためになかなか燃えない。一晚中寒さのために一睡もできなかった。二晩目は疲れて防寒外套にくるまってやっと寝ることができた。

抑留生活の実感が出てきた。これからが未知の日々の生活が始まるのだ。三日目山を下り引率されるまま着いたところがナホトカ。ホームのない駅より有蓋車にすし詰めにされ外よりドアを閉められ、中は人息でむんむんして暑くてたまらない、小便することもままならず、進行しては停まりの繰り返し、何時間走ったのかわからない。着いた場所はアルチョム地区アルチヨングレスという部落でした。早速収容所に連行され、私たちは天幕の小屋屋に入れられ、通路両側に寝る。中央に石炭ストーブが一個備えられていた。

作業は一班二十人にて日本のブロックのような品物をつくる作業。昼夜二交替制で、材料は石炭を燃やした後のアース殻をミキサーに入れ、セメントに水を加え練った品物を木の型枠に入れ木槌でたたき、それを乾燥室に入れ一週間くらいかかって乾燥させる。縦横十五センチの長さ三十センチくらいのドームをつくるためのブロック。仕事はノルマ制で一人生産個数を割り当てられ、作業場とはいえ、屋根の下にミキサー一台設置してあり屋外の作業と同じで、風通しはよく回

転部分はよいけれど、それ以上の場所は水を使用するために全部凍りついている。作業は防寒外套、防寒手袋、防寒靴という服装でしたが、足などの感覚は全くなく、顔は針を刺すような痛み、凍傷になるのではないかと心配の連続でした。休憩するときは乾燥室に入り暖をとり、我れに返った気持ちになります。

余りの寒さのために人より早く乾燥室に入りたい気持ちになる。暖をとっているとカマンジールに（ラポーター・ニハラショー）と文句を言われる。そのためにノルマをふやされ、我が身を削りながらの作業。食事はアワ、コウリヤン、エン麦、豆類、黒パン等の雑穀類。お腹を満たしてくれるにはほど遠く、食事のときなどパンが大きい、小さいと人々とまなざしは戦々恐々と見つめている。明日への生命の源である。

夜食などなくいつも空腹の中の仕事。肉体は栄養失調の状態となり、ただ気力で仕事をし、少しでも早く帰国したい一心のために、いつも気力を充実させながらその日を待ちつつ仕事をした。夜など戦友たちとの会話の中で帰りたいという言葉をだれとなく口にする

るようになってきた。俗に捕虜ほけというのである。朝言われたことを夜に忘れてしまう。朝、何を言われたかだれも答えられない、記憶力喪失。戦友たちも体力の消耗に気づき始めたのではないかと思う。自分自身これから先、命がいつまで続くかと不安になってきた。

毎日の過酷なラポータと悪い食事と寒さのために体力の消耗が身にしてみえた。その後、一般の建物に移ることができた。仕事は火力発電所の石炭おろし、この仕事も昼夜二交替制二十人ほどにて、四、五百トンの石炭おろし、有蓋車は五十トン車、二十七トン車、石炭は天井近くまでいっぱい積んである。五十トン車の場合八人ほどでおろすのに一時間もかかる。それに無蓋車は塊炭、粉炭一回に十五両から二十両くらい入ってくる。なかなか力の要る仕事であった。目と歯だけ白く顔は真っ黒。昼間の仕事は石炭の種類によってはノルマの上がない場合がある、特に塊炭などの場合スコップで一回一回おろさなくてはならない。カマンジールが時々作業を見て回りに来るが、ノルマの

上がらない場合などは昼食を食べることが許されない。

ニハラショーラボータのためにそのときは夜間作業員の交替の人たちが来るまで作業を継続させられる。

少ない食事で昼食抜きの仕事は、空腹を通り越してただ気力で仕事をしているだけ、それだけ我が身を削っている。石炭おろしの仕事は力仕事で大変重労働であった。帰りにバニーヤに入ることが唯一の心の慰めであった。夜間作業を終え収容所に帰っても寝るにも寝られない。窓ガラスが凍りついて白くなっている。

戦友たち毛布を集めても寒くてたまらない。着のみ着のまま毛布一枚の寝台、暖房設備はあっても、たいていない。冷蔵庫の中に寝かされているようだ。マイナス三十度前後の気候の中での仕事、実にみじめな収容所であった。戦い敗れても故国あり、いつの日か帰りを待つ。

二十二年の春ころよりナホトカの方面に貨車に乗った日本兵が通過して行くのが目につくようになった。中には紙片に日本タモイの紙を落としていく人もい

た。これを読んだとき我々も近いうちに帰るのだと思う気持ちが出てきた。いつ帰れるかわからない抑留生活であった。

幸いにして四月中旬、我々にもタモイの話があり、収容所全員貨車に乗せられナホトカに向かうことができた。

ナホトカの砂地に天幕が数多く張っておりその一幕に入ることができた。話によれば第一、第二、第三、ラーゲルを日数を過ごして移動し、第三ラーゲルに入るようになれば後は帰国の船が入港するのを待つだけと聞いた。幸いにも順調に移動することができ、第三ラーゲルに入ることができた、後は迎えの船が入港するのを待つのみだった。

四月二十四日、船尾に日の丸の旗がなびいた船が岸壁に着く。タラップがおりる後は順番に乗船するのみ。タラップがあり、船上にそれぞれの担当者が人員の確認をする中を一步一步船に上る。その瞬間、今まで苦しんだ土を離れる実感がわいてきた。

本船に足を踏み入れたとき両側に船員並びに看護婦

が我々を迎えてくれた。

「長い間、ご苦労さまでした。」の一言が胸に迫り、涙を押さえることができなかった。

船の中に腰を下ろして初めて我れに返った。これでやっと日本に帰れるのだと実感が出てきた。

白いご飯、みそ汁、お新香を久しく口にすることがなかったで日本の味を食することができ、とてもうれしかった。

後は舞鶴港に上陸するのみとなった。

抑留の日々

島根県 大谷 昭

二十年十二月二十九日、北朝鮮東海岸北緯四十四度にある興南という工場地帯の港で、ソ連国旗を揚げた輸送船に乗船した。

気温は約零下十度、小雪がちらつく日であった。日本人の通訳の話では東京ダモイだとのことだが、平壤

でソ連軍の管轄になってからだまされ続けてきた。その状況は到底日本へ帰還できるとは考えられなかった。

一昼夜航海を続けたころ、船腹の鉄板が氷結し出して真っ白になり、波を切る音がバリバリと氷を割っている音に変わり始めた。

寒さと空腹と疲労でもうろうとなった。

数時間後船がとまっていることに気づいた。出航して四十時間くらいの間、上甲板の出口には自動小銃を持ったソ連兵がいて、甲板へ上ることができなかった。やがて、上れるようになり、出て見ると甲板はごろごろした厚い氷が張り鉄骨もロープも氷結していた。数時間止まっていた船が方向をかえて再び航行を始めた。

数か月してわかったことだが、ウラジオストック港の入り口は氷が厚く入港できず、やむなくナホトカヘ向かったとのことである。

その翌日、下船をする段取りとなった。

気温は低く防寒衣に突き刺さるような寒さである。